

## 科学研究費補助金

平成 27 年度～平成 30 年度

研究種目名：基盤研究(C) (一般)

課題番号：15K04530

研究課題名：保育者養成校における演劇を専門としない教員のための劇表現指導教材の開発

研究代表者：山本直樹

所属・職：子ども教育学科・准教授

研究概要：保育者養成校における劇的な授業の開講状況を調査したところ、表現分野を複合的に扱う「保育内容（表現）」の中で、音楽や造形等を専門とする教員が劇的内容を扱う養成校が多数あった。

また、学習成果の総まとめとして形式的に演劇を使うことも保育者養成校では一般的だが、もっと表現授業において日常保育の中の劇表現（劇遊び、ごっこ遊び、ふり遊び、見立て遊び、ドラマ等）を活かせれば、子どもの遊びを学生が再経験するような機会をつくり出せよう。ただ、その専門家でなければ難しいはずである。そこで本研究は複合的な「保育内容（表現）」の授業の中で、演劇を専門としない教員が劇的要素を意義深く活用することができるための内容や工夫点、展開方法等を明らかにし、その成果をまとめた劇表現指導教材として開発することを目的とする。

平成 25 年度～27 年度

研究種目：基盤研究 C

課題番号：25370123

研究課題名：「江戸～昭和期の常磐津節演奏家に関する基盤研究

研究代表者：前原恵美

所属・職：芸術教養学科・准教授

研究概要：本研究は、江戸～昭和期の常磐津節演奏家情報を網羅的に収集・検証・整理・公開する常磐津節の基盤研究であり、応募者が平成 22 年～24 年度に科学研究費の助成を受けて行った「江戸～大正期の常磐津節演奏家研究」を踏まえた研究でもある。

本研究の目的は以下の 3 つ、1) 「吉原細見」に見られる演奏家情報の捕捉調査と公開、2) 江戸天下祭（神田祭、山王祭、根津祭）を中心とした祭礼資料の調査・整理、3) 常磐津英寿への昭和初期以降の三味線音楽界についてのインタビュー調査、である。

いずれも平成 22～24 年度に行った常磐津節演奏家研究の過程で特に必要性が感じられた調査研究であり、これらにより常磐津節はもとより、周辺三味線音楽研究の一助ともなると考える。

平成 24 年度～26 年度

研究種目：若手研究 B

課題番号：24730687

研究課題名：「保育者養成における『劇表現指導法』のカリキュラム・モデルと補助教材の開発」

研究代表者：山本直樹

所属・職：子ども教育学科・講師

研究概要：保育者養成における「表現指導法」の中にいわゆるごっこ遊びや劇遊びを包括する劇表現があるが、対応授業はあまり開講されておらず、総合的な演劇発表で代用するが多い。それは劇遊びという概念が曖昧でその指導法も明確になっていないことに起因しよう。発表の経験も子どもの発達には重要だが、子どもが想像力を使って絵本の世界に飛び込み、全身体的な自己表現を通して自信に繋げようとする、過程としての劇的な体験も重要であろう。

本研究はドラマの視点を活かし、学生の現場実践もふまえて、劇遊びやその指導法を検討・整理した上で、「劇表現指導法」のカリキュラム・モデルと保育者養成教員用の補助教材を開発することを目的とする。

平成 23 年度～25 年度

研究種目：若手研究 B

課題番号：23730780

研究課題名：「日中の幼稚園の成立と展開に関する比較史研究」－母親の位置づけを主要な視点として－

研究代表者：日暮トモ子

所属・職：子ども教育学科・准教授

研究概要：本研究は、幼稚園の成立と展開の過程を、母親の役割や位置づけを主たる視点に置き、我が国と中国の状況と比較することを通じて、我が国の幼稚園制度の特徴の一端を明らかにするものである。

両国はいずれも海外から幼稚園が移入された経緯を持つ。その過程で母親の教育的役割がどのように論じられていたのかを比較によって明らかにする。このことによって、幼稚園論の中で母親の姿が消え、幼稚園がしだいに学校化していく過程を指摘することができるだけでなく、幼稚園論と母親論との関係を問わずに、幼保連携・幼小連携など制度面の統合のみが強調されている今日の我が国の就学前教育政策論を批判的に検証するための知見を得ることが期待される。

平成 22 年度～24 年度

研究種目：基盤研究（C）一般

課題番号：22520165

研究課題名：「江戸～大正期の常磐津節演奏家研究」

研究代表者：前原 恵美

所属・職：芸術教養学科・講師

研究概要：本研究は、江戸～大正期の常磐津節演奏家情報を網羅的に収集・検証・整理・公開する常磐津節の研究である。研究者が所持している、町田嘉章による膨大な未公開メモの清書（複写。原本はメモも清書も所在不明）を柱に、その検証と補足を行い、かつ研究者がこれまで積み上げてきた、吉原の男芸者としての常磐津節演奏家の音楽活動の実態も重ね合わせて、江戸～大正期の常磐津節演奏家研究として結実させることを目的としている。この町田嘉章による未公開メモの清書コピーは、江戸時代からほぼ大正時代までを対象に、浄瑠璃、三味線、家元の三資料にわかれており、取り上げられている演奏家は 200 名を超える。この膨大な量の三種のメモが稀音家義丸氏によって丁寧に清書され、そのコピーが手元に残っている。この入手の経緯についての聞き取り調査報告、三資料の情報源の整理、体裁の検証は、すでに論文としてまとめ、この中ですでに本研究の指針となる対象（演奏者）の分類、情報整理の項目や構成等について提示している（2010 年 4 月、発行予定）。なお、昭和期以降の常磐津節演奏家については別途計画しており、両者を併せることで、さらに常磐津節研究に大きく資すると確信している。

平成 19 年度～21 年度

研究種目：基盤研究（B）海外

課題番号：19401013

研究課題名：「モースコレクションにおける日本音楽資料の悉皆調査」

研究代表者：茂手木 潔子

所属・職：芸術教養学科・教授

研究概要：1877～1883 年の間に 3 回にわたって来日した米人博物学者、E.S.モースが収集した膨大な日本文化資料の中から、伝統音楽に関する資料に焦点を当て、その種類、実態を調査した研究である。主な調査場所はセーラム市(ボストン近郊)のピーボディ・エセックス博物館 (PEM)、ボストン美術館 (MFA)、カナダのバンフにあるホワイト美術館の 3 か所で、日本の楽器とその付属品、音具、楽譜、日本楽器に関して書かれた記述を収集整理分類した。研究の結果、現在日本では見られない楽器の存在や、来日当時の伝統音楽の演奏状況の詳細が明らかになった。